

二百授之賊拔刀叱曰所以求客者豈止是而已哉速卸衣裳及佩刀否則不須多言藤樹神色不變曰姑緩之吾慮其授與不孰是乃瞑目叉手少頃曰吾慮之假戰而不利無輕卸以與汝之理卽撫刀起且曰戰者必先以姓名告我近江人中江與右衛門也於是賊大驚投刀羅拜曰敵鄉雖五尺童子莫不知藤樹先生爲聖人者吾黨雖攘攫爲活豈得施之聖人哉願先生矜其不知而宥之藤樹曰人誰無過過而能改善孰大焉乃說之以知行合一之理則賊咸感泣遂率其黨爲良民

〔先哲叢談^四〕伊藤仁齋^略○中

嘗夜行郊外刼賊四五人當路立各按劔曰吾徒不醉不樂今無酒資客若欠腰纏則脫衣裳供之仁齋神色不少動曰今日適無囊錢敵緼袍脫以遺之耳且問汝輩常以何爲業邪曰昏夜橫行掠奪以自給是其業也仁齋曰以若所爲爲業吾何拒焉輒脫服以授之將去於是賊止仁齋曰吾儕草竊爲衣食比年未嘗見舉止如客者抑客何爲者曰儒者也曰儒者爲何事曰以人道教人者也所謂人道者孝於親弟於兄不可一日無而是也人者無道禽獸焉耳言未畢賊皆頓首涕泣曰噫吾與君鈞是人也而事業之迥異如是吾甚耻願君宥吾儕罪今而後飲灰洗胃謹奉教于門下遂皆改心自勵云

〔兔園小說^{十二}〕騙兒悔非自新

加賀の金澤の枯木橋の西なる出村屋太左衛門といふ商人の兩替舗ハ淺野川の東の橋詰にあり文化九年癸酉の大つごもりに卯辰山觀音院の下部使なりと偽りて出村屋が舗に來つ百匁包のえろがねを騙りとりたる癖者ありしを當時隈なくあさりしかども便宜を得ざりしとぞかくて十あまり三とせを経て文政七甲申の年の大つごもりに出村屋が兩替舗に人の出入の繁き折花田色のいとふりたる風呂敷包をなげ入れてこちねんとしてうせしものありたそがれ時の事なればその人としも見とめずして追人ども甲斐はなかりけりさてあるべきにあらざれば太左衛門はいぶかりながら件の包を釋きて見るにうちにはえろかね百匁ばかりと錢